

「希望学」アプローチ多様

希望と社会との関係を研究する「希望学」をめぐる、東大社会科学研究所などが東京・六本木の国際文化会館で国際会議「希望と社会の新たな地平へ」を開き、日米豪の社会学、経済学、法学、政治学、文化人類学などの研究者が討議した。これまでの国内での社会調査に加え、国際的で学際的な交流によって、希望学プロジェクトは新たな展開への可能性を示した。

「この国には何でもある。だが、希望だけがない」と中学生が語る村上龍の小説「希望の国のエクソタス」を紹介した東大の玄田有史教授。岩手県釜石市での調査を踏まえ「個人が希望を持つには、豊かさと同程度

の必要。さらに、挫折を乗り越えた経験があると希望を持ちやすい」と新たな見解を加えた。米デューク大のアン・アリソン教授は日本で起きた少年事件を例に引きながら「安定の源泉としての自分の居場所と自分らしさがなくなっている。自分と社会との関係が揺らいでいる」と指摘した。



国際会議「希望と社会の新たな地平」
(東京・六本木の国際文化会館)

東京で会議 日米豪の研究者が討議

葉を使っている(邦題「合衆国再生 大いなる希望を抱いて」)。希望は個人レベルにとどまらず、社会レベルの問題でもある。

「政治が大衆を動員するには希望を打ち出さないといけない」と述べたのはシドニー大のガッサン・ヒュージ教授。移民の歴史を持つオーストラリアでの人種差別的な事件を紹介し「自分の思い通りにならない他者といかに向き合い、交渉できるか、ということが課題だ」と語った。

東大の広渡清吾教授は「かつてドイツではヒトラーの第三帝国が希望だった。希望の本身は、良いものも悪いものもある。希望というカテゴリーなしに、この社会を分析できない」と希望学を研究する意義を強調。大阪大の草郷孝好准教授は「個人的なミクロのレベルと制度などマクロの

レベルの希望を整理して考えるべきだ」という見解を示した。

これを受けて、東大の宇野重規准教授は「希望は個人の問題で『ある方向に社会を向かわせるために論じた。』

るのはウソだ」と思い切った。言ってしまうとも思う」としながらも「社会全体としての希望を論じないと、ウソを言う人たちが出てくる危険がある」と話した。

中国新聞
2008年1月19日